

與セリ

昭和十二年三月卒業スベキ各本科選科並ニ圖畫師範科生徒九十五名ノ実地修學ノ為本年度ノ初四月六日ヨリ同月二十一日迄十六日間教授二名生徒主事一名助教一名書記一名講師一名之ガ引率又ハ附添ニ任シ三重京都奈良ノ一府二縣ニ出張シ著名ナル神社佛閣等ヲ歴觀シテ美術上ノ実地研修ヲナシタリ
本校ニ於テハ生徒皆通學ナルヲ以テ寄宿舎ニ關シテ申報スベキ事項ナシ

將來施設上重要ト認ムル件

大講堂新設ノ件〔昭和四年度以降報告と
ほぼ同文につき省略。〕

圖畫師範科ノ修業年限ヲ四年ニ延長スルノ件〔昭和九年度以降報告
と同文につき省略。〕
版畫教室設置ノ件〔昭和十年度報告と
同文につき省略。〕

雜件

生徒實驗ノ資ニ供スル為諸所ヨリ依囑ヲ受ケ製作ニ從事シタルモノ、中重ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

依囑製作一覽

品目	數量	受託年度	竣工年度	依頼者
賞牌	七個	昭和十一年七月一日	昭和十一年九月四日	日本學術協會理事 西成甫
花盛器	貳個	同 年九月十四日	同 年十月二十二日	農林省馬政局
花盛器	貳個	同 十二年二月五日	昭和十二年三月十二日	同上

『校友会会報』記事抜粋

學校記事〔七。S・十一・二一・二二〕
年 月 日

職員辭令

帝國美術院會院被仰付〔員〕 昭和十年六月一日 内閣 教授 和田 三造
雇 粕谷 仲三

依願解雇 同十一月二十六日 本校 講師 杉田 精二

敘從六位 同十二月二日 宮内省 講師 新 規〔矩〕 規矩男

依願解囑 同十二月十六日 本校 各通 教授 岡田三郎助

滿洲國へ出張所ヲ命ス 同十二月十八日 文部省 同 講師 和田 三造

各通 講師 金澤 庸治

〔美〕 任東京美術學校助教 昭和十一年一月八日 文部省 同 丸山 義男

野砲兵第一聯隊附陸軍砲兵少佐 森重 幡雄

東京美術學校服務ヲ免ス 同一月二十日 陸軍省 步兵第一聯隊附陸軍歩兵中佐 松崎 達郎

東京美術學校服務ヲ命ス 同一月八日 陸軍省 助教 松田 義之

任東京美術學校教授 敘高等官七等 同一月二十日 内閣

教練查閱報告

本校教練查閱は例年十一月下旬實施せられつゝありしが、本年は

査閲官の止むを得ざる故障と且前配屬將校森重教官の病氣入院等の關係上延期に延期を重ね去る一月二十四日午前九時より校内運動場に於て實施せらる。之れより先、一月二十日附を以て東京藥學專門學校服務陸軍歩兵中佐松崎達郎氏本校兼務を發令せられ翌二十一日着任親しく指導せられ各學年次の如き科目を實施せり。

豫科、師一、分隊密集教練、散兵各個教練、各本科一、執銃各個教練、分隊疎開教練、各本科二、師二、小隊疎開教練、中隊密集教練、各本科三、師三、中隊密集、疎開教練、各學年學科諮問

當日は幸にも好天氣に恵まれ美校五百の健兒勇躍奮闘の結果大に其の眞價を發揮し査閲官たる歩兵第一旅團長佐藤少將閣下より良好との講評を受けたり、尙、査閲當日は酷寒の折にも不拘校長先生始め各科教官多數參列せられ大に生徒の志氣を鼓舞せられたり 茲に厚く感謝の意を表す次第なり。

版畫教室使り

S兄足下

ぬざべ ぬざぼん いるそん えるそん と佛文法を習つた合田〔清〕先生を思ひ出して下さい。今日版畫教室で平塚〔運一〕先生が、今となつては懐しく顔が浮かんでくる合田先生の木口版畫を持つて來て見せてくれたのです。細かい曲線の配列、歪んだ鏡で箆を見る様なビュランの彫りに、其の根氣良さをいやに感心して眺めたものです。自分で木口版畫でも彫つてみたら、あの根氣には未だく益々感心もするでせう。

矢張り自分で手掛かけて見ないと其きは判らない、例へばです、レンブランドのエツチングです。尤も繪を描く腕もいゝですが製版の技術と來たらぞつとする程に怖いですから。又言ひます、手がけてみないと判らない。

油繪描きには油繪だけ、木彫家は木彫だけ狭く深く油井の様に堅坑を堀ればいゝと云ふ考へ方もあるでせう。然し版畫をやると、同じ油繪やるにしても視野が廣くなる、と云つた意味の事を田邊〔至〕先生は述べてゐられます。

ゴーガンのノアノアの版畫をS兄、僕はいつか貴兄に頂きました。ピカソもマチスも版畫をやつてゐます。貴兄の好きなムンクは石版の作品も多いですが、あの北歐人の憂愁に顫へる神經が、ドライポイントの版畫によつて心憎いまでに語られてゐるのを御存じでせう。

何度も書きますが、自分で手がけてみないと判らない。ほんとに判らなかつた話があるのです。ピサロの素描とぼつかり思ひ込んで眺めてゐたものが、今になつて見ると其がソフトエツチングだつた。然し唯それだけの知識を獲たゞけでそんな事知らなくとも繪は描ける、と言ひ捨てる手もありませうが、今更學而第一でもありませんが、知る事は生む事の豫想を胎みます。生活體驗の擴充といふものでせう。例へば小説より戯曲の方がより適切に表はす世界がある如く、版畫によつて最も適切に表はせる生活もあるのです。

アクアチント版の理解はなくしてはゴヤの版畫は判らない。引いてはゴヤの藝術は正しい批判鑑賞までに至らないとも云へるかも知れませんが、云へるでせう。

S 兄足下

とに角僕は版畫の一年坊主で偉さうな事は書けない、書けもしないのです。

版畫藝術の價値に就いてはもつと偉い人の著書にも出てませうし、貴兄が思ひ出した様に隔年位に下さる年賀狀の版畫は僕なんかよりうんと味なものです。

貴兄が學校に居られた頃は版畫部という存在はありましたが、版畫教室の設置は無かつたのでした。

版畫教室が出来たのは今年からです。

版畫部時代は研究も木版だけに限られてゐたやうでしたが、今は堂々と一戸を構えた版畫教室なのです。

工藝科教室の窓下を通つて行く工藝科の塑造室を知つてゐるでせう、食堂の裏です。あそこの庭の突當りに廣い板扉を左右に推し開いた建物が版畫教室です。

外見は物置みたいですが、午後の日ざしが斜に射し込む土間に入れば、其處に素晴らしいプレスが二本の大きな鐵のローラーを光らして据えられてゐるのを見るでせう。隅つこのヒーターでは誰かアクリント製版のために樹脂を固着させてゐるのかも知れない後姿も見るでせう

混土の土間から左へ部屋が深く續いて長机の置かれた板の間、それから之は又疊を敷きつめた寺小屋みたいな一段高い一室、それに相應しい机が行儀よく整列してゐるのです。

版畫を研究してゐる生徒は木版、エッチング各二十名、日本畫、油繪、彫刻科と工藝科の圖案部の三四年生から希望者を募つて詮衡

し、指導に當^{〔た〕}られるのはエッチングを田邊教授と松田義之教授木版は此教室のため新しく平塚運一先生が學校へ招かれてゐます。

田邊先生も時に擴大鏡を覗きこんで製版されるのです。そんな時など先生を圍んでのつぼ達が取巻くので嘸お手許が暗い事だらうと想像して下さい。

僕達のエッチングでも、先生にインキングして貰ふと一寸見違へるほどなのですが、斯んな事にも用意と熟練と理解の深さを考へさせられます。

松田先生はドライポイントやソフトグラウンド、又は鹽化鐵による腐蝕版を製作して無言の指導に當られます。いや無言と言つても口では僕達と無駄話など交はしながらです。

平塚先生は風呂敷包をかゝえなくては出勤されない先生です。此の風呂敷包から何が出るか、それは先生の蒐集にかゝる古版畫であつたり、珍本に屬する版畫入りの古畫冊、或は外國版の木口版畫の挿繪のある近代の詩集だつたり、エッチングの生徒も一應は靴を脱いで座敷に上る癖を全く此の爲に植え付けられてしまひました。

三學期には木版師を學校に呼んで、複製版畫の彫りと摺りの實演見學も催されたのでした。何れ又今度は木口木版の職人の彫りを見學する計畫も企てゝあるのです。

版畫所室の今後として石版畫の研究も考へられようし、ビューラー彫りの銅版畫、木口木版、エッチングと木版を併用する色版の研究なども當然この教室で試みられ發表されるべきものでは無いでせうか。之は直接製版とは關係淺い事かも知れませんが、現代の新聞雑誌の挿繪です。

例へば夕刊第一面によく見受ける、挿繪畫家で無く畫家の描いた挿繪が、往々にして所謂職人的挿畫家より見劣りがするのを發見するでせう。

變に調子が落着かなかつたり、原畫では鋭い線だらうのにと思はれ乍らも鈍いのは、畫家に寫眞銅版寫眞凸版の理解が要するに足りない事に結論づけられると思ひました。

回を重ねるにつれて版に對する研究が屆くせぬか、時には見違へるほど効果的な挿繪に替つて行くのを見受けます。

現代繪畫の露出面は一つは展覽會藝術であり、他の一つは挿繪であるとも考へられます。

其は純文藝や大衆通俗文藝とは又違つた分類に依るべきものか知れませんが、挿繪が直接大衆に觸れ喚びかけ、かなりな指導性を持ち得るものである事を思ふと、斯かる方面の製版に對する知識も一とよりは此の版畫教室で持ちたい、こんな事も考へます。

曾つての日本美術は版畫に依つて代表されたものでした。然し何時迄廣重や春信の繰り返へし無批判無反省の踏襲でもあるまい、之等先人の作品の理解研究の上に今日の日本は今日の日本の版畫を産まねばならない。唯日本のモチーフや技法のために世にもてはやされるとしたならば、例へば瓜哇の音樂が喜ばれる傾向と何らの變りも無い。少女稻田のフィギュアスケートがはるばる日本から來た少女といふハンデキャップを持たされて評點されるのだつたら、日本のスケート界は淋しからう。今日の版畫藝術の理念はそんなものではない。如何でせう、そうです當り前でせう。

學校記事〔八。S・十一・六・三〇〕

職員辭令

敍從七位 昭和十一年二月一日 宮内省

教授 松田 義之

依願解雇 昭和十一年二月二十日 本校

雇 黒岩 吉三

陞敍高等官六等 昭和十一年三月二日 内閣

教授 高村 豊周

東京美術學校雇ヲ命ス

有賀 活郎

經理課庶務掛ヲ命ス 昭和十一年二月九日

本校

教授 松田 義之

教員檢定委員會臨時〔委〕員被仰付

各通

講師 鈴木 信一

各通

委員 松田 義之
同 鈴木 信一

第二部部屬ヲ命ス 同年同月同日 文部省

教授 田邊 至

陞敍高等官四等 同年四月一日 内閣

教授 岡田三郎助

各通

同 六角注多良

同 津田 信夫

同 和田 三造

同 海野 清
工藝審査委員會〔委員〕被仰付 同年四月八日 内閣 委員 岡田三郎助

第一部兼第二部員ヲ命ス

委員 六角注多良

同 津田 信夫

同 和田 三造

同 海野 清

〔第〕
第二部兼第一部員ヲ命ス 昭和十一年四月八日 商工省

佐々木 孔

臨時版畫教室教務ヲ囑託ス 昭和十一年四月十四日

本校 小林 萬吾

敍勳四等授瑞寶章 昭和十一年四月十五日

賞勳局 教 授 田邊 至

敍正六位 昭和十一年四月十五日 宮内省

教 授 津田 信夫

富山市主催日滿産業大博覽會第七部審査部長ヲ囑託ス 昭和十一年

五月十一日 商工省

助教授 山崎覺太郎

同 伊原宇三郎

富山市主催日滿産業大博覽會審査官ヲ囑託ス 昭和十一年五月十一

日 商工省

○黒岩〔吉三〕雇 經理課庶務掛として勤務して居りましたが家

事の都合上退職せられました。

○丸山〔義男〕助教 板橋區練馬南町五ノ六七四一へ轉居せられ
ました。

卒業生姓名卒業製作目録（度次いろは順）

日本畫科

函嶺秋色

川ちかき道

漁 村

漁村小景

秋立つ濱

秋 郊

都會風景

仁王門

砂 丘

山峽の秋

滿洲の市場

街 裏

みわさの奥

水郷白日

あぐり船

白 雨

小康の日

山 村

本科 井上 迪彦 鳥取

同 服部幸太郎 東京

同 岡部 秀 山口

同 荻原 勝衛 東京

同 若海 鍋吉 埼玉

同 加藤 幹一 山形

同 勝木 實 山口

同 金湖 隆善 山形

同 高山 辰雄 大分

同 田中 憲之 長野

同 辻 勝喜 佐賀

同 倉光 博 愛知

同 藤谷 正春 東京

同 青木 義雄 東京

同 榊原考一郎 東京

同 守屋 正 岐阜

同 森本 醇一 福井

同 鈴木 英二 東京

油畫科

粧	裸婦	黒衣少女	室内裸女	裸婦	裸婦	マドモアゼルK	紅衣	セ子チャン	花を持てる女	雪國のゴム靴直し	二人坐像	赤い服の女	母のひざ	裸婦	憩	ギターを持てる女	臥裸婦	R子の像	茶色の洋服	紫衣	畫家の像	赤服	ポーズ		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
自畫像	本科	井上自助	岩田榮	伊藤彰	池田輝之	橋本正躬	富山良次	沈亨求	李石樵	大山英夫	川田恒之輔	上原誠	香月泰男	河口正喜	高木周平	武田儀助	根守悦夫	中西次郎	永田精二	中村立行	中久木康夫	野口徳次	野末恒三	同薬師寺孝太郎	山中清一郎
福岡	東京	鳥取	東京	兵庫	富山	朝鮮	臺北	臺北	大分	埼玉	岐阜	山口	福岡	東京	東京	山形	北海道	岡山	東京	兵庫	東京	宮崎	静岡	東京	大分

婦女像	裸婦	憩	ふたり	父の像	青衣	孤岩の日蓮	裸婦	港町風景	婦人坐像	待機	コスチューム	ジャケツの女	支那服	少女坐像	彫刻科	塑造部	友人の顔	女の首	女人像、男	卒業製作	生、ヴィナス(模刻)	坐せる女、モニユマン試作(正行訓)	戒(一部)	少女胸像、T氏像
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	本科	同	同	同	同	同	同	同	同
藤岡俊一郎	船越達仁	江守龜男	寺田春一	赤津實	齊藤齋	里見明正	神克文	城信義	廣瀬正雄	須藤清彦	須澤鴻	杉山一正	杉山卓	鈴木貞三	同	石田尙友	新田實	吉田芳夫	能美八重夫	黒川泰	柳原義達	古池恒雄	同	
茨城	栃木	東京	神奈川	福島	熊本	埼玉	新潟	熊本	京都	栃木	岡山	岡山	岡山	東京	同	佐賀	宮城	東京	福岡	大分	兵庫	茨城	同	

芳 靈
少女の首、男の首
少女坐像、婦女像
女立像
鏡
弟を作る
コスチューム
少女
木彫部
坐像、〔が〕ま(小品)
うきわ
清寂
女立像
静思、軍鶏
女子立像、少女立像

同 木場 春彦 鹿児島
同 有井 正二 山口
同 澤柳 善人 長野
同 佐藤 邦輔 東京
同 水船 六洲 廣島
同 清水 勳 神奈川
同 關 長造 富山
同 豫科 吉川 常雄 京都

都市計劃上の新課題
Design for square
九つのステージ・コスチューム
移動輕食堂試案
オリンピックポスター及トロフィ圖案
乗馬服及乗馬クラブサロン室内裝飾圖案
海水浴場遊戯具並コスチューム
彫金部
蟬文花器
鐵製水盤
唐草紋小篋
鳥唐草模様亂箱
喫煙具
水滴
鍛金部
鍛鐵壁面燭臺
鑄金部
浜を主題とする裝飾的立體
暖爐への裝飾品
漫然たる集合
置物
室内噴水
漆工部
重箱

同 前田 第二 石川
同 松川 蒸二 東京
同 増田正次郎 東京
同 福永 正一 熊本
同 島 元次 東京
同 須藤 周雄 埼玉
同 杉浦 發夫 愛知
本科 飯田 正美 東京
同 吉村 博 島根
同 村田 與一 廣島
同 松尾 忠次 佐賀
同 島崎正二郎 長野
同 森田 民藏 千葉
本科 多田 貞三 京都
本科 畑 正夫 富山
同 原 直陳 新潟
同 新川 太郎 岐阜
同 中堀 正孝 京都
同 桑田忠之助 鳥取
本科 笠木敦次郎 東京

圖案部
觀光列車及國際列車用食堂車圖案
兒童禮拜堂室內裝飾
服飾日本スタイル
年齢別玩具圖案
東洋的古典の再吟味
ウインドウとアドバルーン圖案
サービスと宣傳機構

本科 稻垣耕四郎 京都
同 戸川 愼一 東京
同 大谷 文雄 東京
同 和田 義三 東京
同 吉村 俊一 石川
同 山口 茂 京都
同 山本 元夫 京都

鍛鐵壁面燭臺
鑄金部
浜を主題とする裝飾的立體
暖爐への裝飾品
漫然たる集合
置物
室内噴水
漆工部
重箱

本科 多田 貞三 京都
本科 畑 正夫 富山
同 原 直陳 新潟
同 新川 太郎 岐阜
同 中堀 正孝 京都
同 桑田忠之助 鳥取
本科 笠木敦次郎 東京

装身具小棚 同 小島理吉郎 島根

文庫(秋園) 同 平野 清吉 富山

建築科

田園都市 本科 富田 哲輔 東京

温泉地に建つホテル娛樂場 同 大塚 常雄 佐賀

美術家街計畫 同 大澤 三郎 東京

國際觀光會館 同 田村 正夫 新潟

師範科

平常成績品(師範科に於ては卒業製作を行はず)

習作(油畫) 小倉 新 東京

同 尾崎 勉 長崎

同 高田 肇三 埼玉

同 武澤 久 福井

同 鳴瀬 幸一 石川

同 長沼 政一 東京

同 中尾 功 福岡

同 野地 正記 福島

同 沓澤雄太郎 秋田

同 (日本畫) 松元 三郎 鹿児島

同 (油畫) 青野 三郎 茨城

同 宮野 藏人 大分

同 宮澤 治正 岡山

同 菱川 幸男 鹿児島

同 鈴木 新夫 福島

其他習字及手工(木工、金工、染色刺繡)の作品

卒業生科別人員

科名 本科 選科 特別學生 計

日本畫科 一八〇〇〇 一八

油畫科 三九〇〇〇 三九

彫刻科 塑造部 一四〇〇〇 一五

木彫部 六〇〇〇 六

圖案部 一四〇〇〇 一四

工藝科 彫金部 六〇〇〇 六

鍛金部 一〇〇〇 一

鑄金部 五〇〇〇 五

漆工部 三〇〇〇 三

建築科 四〇〇〇 四

圖畫師範科 一五〇〇 一五

合計 一二五〇〇 一二六

新入生氏名(出身学校省略)

日本畫科

氏名

伊藤理一郎 三河義太郎

高橋 良松 大田 歳夫

高柳 博也 酒井 道治

山本 一夫

込山 俊男

下林 教生

二瓶 一司

渡邊 富雄

寺門 彦壽

齋藤傳一郎

寺田 吉松

原 和男

吉田 耕三

三尾 正豐

赤尾 周一

津村 邦雄

小寺 昌三

羽柴 信

酒井 英也

田所 量司

彫刻科木彫部

服部 幹夫

各務 滿

峠原 敏夫

窪田 要藏

熊澤 欽三

鈴木 德平

立川 義明

川瀨 永治

油畫科

仲井 潔

貞廣 幸一

北岡 文雄

本間 敏之

范 德煥

堂前 俊雄

加藤 長一

鮫島 宗明

小泉 富司

米田 重博

吉川 正己

佐原雄次郎

大橋勘一郎

篠窪 亮

吉野 廣行

吉川 正己

佐藤 敏良

田村 耕一

孝忠 毅

長岡 定雄

植木甲子夫

安達 勝三

石井 輝夫

田澤 武美

加藤 孝一

谷澤 一郎

小島 昇

川本 敏郎

前川 治朗

岩本 敏郎

鶴 甫

鶴飼 毅

李 純 鐘

新井 隆二

花摘 幹夫

永廣 四郎

關口 孝次

小島 市造

越智 正人

彫金部

渡邊 泰造

小泉 正名

白澤 龍生

中村 萬平

井上 慎

遠藤 鈺司

松本外茂次

宮川 祿郎

梶 進

中村 良兒

天野 文作

川本 鈞一

飯田 泰造

谷口 廣

吉田 政次

松永敏太郎

山本 仁朗

鑄金部

伊差川新吉

生駒 親雄

吳 天華

廣江 靜致

奇 義 關

鑄金部

杉田 禮三

大山 倍

特別學生

田 風

王 式 郎

松村 禮一

漆工部

小倉 文吾

伊差川新吉

彫刻科塑造部

北古賀一郎

益田 信行

堤 達男

小倉 文吾

伊差川新吉

生駒 親雄

金 鐘 瑛

滿生 茂夫

松下 隆治

片岡 茂保

杉田 禮三

大山 倍

秋元 喜義

松角勇次郎

黃 清 埜

稻塚 芳郎

里内 直次

國領 辰彌

黃 清 埜

建築科

清家 清
 三苦 正光
 赤松 元

村田 豐
 小林 忠雄
 袴田 誠
 寺島 成和

特別學生

許 統 璋

圖畫師範科

石河 彦男
 佐々木節雄
 梅田 章
 渡邊 安友
 長 一雄

眞木 宜武
 大島 勳
 永山 利雄
 大沼 一彦
 佐藤 辰雄

峠原 敏夫
 小守林宇吉
 志津 輝雄
 鈴木 堅司
 卷島 友治

學校記事〔九。S・十一・十二・一三〕

職員辭令

昭和十一年六月十日

教 授 和田 三造
 各通 教 授 高村 豊周
 助教授 松田 權六

昭和十一年商工省輸出工藝展覽會審査委員ヲ囑託ス

同年 同月十三日

敍勳二等授瑞寶章 賞勳局

同年 同月二十日

陞敍高等官一等 內閣

學校長 和田 英作

本校講師ヲ囑託ス 但工藝科塑造授業擔任トス 本校

囑託 加藤鬼頭太

依願解囑

講 師 高島 米峰

任東京美術學校助教授 文部省

各通 講 師 羽下 修三
 講 師 磯矢 陽

彫刻科木彫部勤務ヲ命ス 但木彫授業擔任トス 本校

助教授 羽下 修三

工藝科漆工部勤務ヲ命ス 但蒔繪及調漆授業擔任トス 工藝化學
 室兼務ヲ命ス 本校

助教授 磯矢 陽

同年 同月二十二日

依願免本官 內閣

學校長 和田 英作

東京美術學校長事務取扱ヲ命ス 文部省

教 授 岡田三郎助

補美術研究所長 文部省

教 授 矢代 幸雄

同年 七月一日

陞敍高等官三等 內閣

教 授 香取秀治郎

同年 同月三日

助教 山崎覺太郎

工藝品ノ輸出増進ニ關スル調査ヲ囑託ス 商工省
同年 同月八日

正四位勳三等 和田 英作

敍從三位 宮内省 特旨ヲ以テ位一級被進

同年 同月十五日

教授 香取秀治郎

敍從五位 宮内省

同年 八月一日

陸軍歩兵中佐 松崎 達郎
從五位勳四等

任陸軍歩兵大佐 内閣

輜重兵第一聯隊附 本間幸太郎
陸軍輜重兵中佐

東京美術學校服務ヲ命ス 陸軍省

歩兵第一聯隊附 松崎 達郎
陸軍歩兵大佐

横濱高等工業學校横濱高等工業學校附設工業教員養成所服務ヲ命ス 陸軍省

同年 同月一日

生徒主事兼教授 佐々木 卓

敍正五位 宮内省

同年 同月十日

教授 多賀谷健吉

敍勳四等授瑞寶章 賞勳局

教授 矢代 幸雄

敍勳五等授瑞寶章 賞勳局

同年 同月十八日

從三位勳三等 和田 英作

東京美術學校名譽教授ノ名稱ヲ授ク 内閣

昭和十一年八月二十日

伊太利國皇帝陛下ヨリ贈與シタル「コンマンドール・クルーロン」勳章ヲ受領シ及ビ佩用スルヲ允許セラル 賞勳局

同年 九月一日

教授 海野 清

陸軍高等官五等 内閣

同年 同月二日

文部省圖書局長 芝田 徹心
正四位勳二等

任東京美術學校長 内閣 敍高等官一等

東京美術學校長事務取扱ヲ免ス 文部省

教授 岡田三郎助

歐米各國へ出張ヲ命ス 商工省

囑託 山崎覺太郎

同年 同月九日

北浦 大介

美術ニ關スル調査ヲ囑託ス 文部省

同年 同月十五日

教授 海野 清

敍從六位 宮内省

同年 同月十八日

正四位勳二等 岡田三郎助
 從四位勳三等 藤島 武二
 從四位勳三等 結城 貞松
 從五位勳六等 六角注多良
 從五位勳四等 小林 萬吾
 從五位勳五等 津田 信夫
 從五位勳五等 清水 龜藏
 從五位勳六等 建島彌一郎
 從四位勳六等 朝倉 文夫
 從四位勳六等 北村 西望
 從五位 南 薰造
 從五位 和田 三造
 從五位 香取秀治郎
 正六位勳五等 石田 英一
 正六位 田邊 至
 從六位 海野 清
 正七位 高村 豊周
 從七位 廣川松五郎
 正八位 松田 權六
 川崎 隆一
 從六位 矢澤 貞則
 從六位 杉田 精二
 文部省 文部省
 講師 石澤 正男

東洋工藝史授業擔任ヲ命ス 本校
 同年 十月二日 正三位勳一等 正木 直彦
 國際觀光委員會委員被仰付 内閣
 同年 十一月二日 教授兼生徒主事 田邊 孝次

陸絛高等官五等 内閣
 絛勳六等授瑞寶章 賞勳局
 教授 田邊 至

常岡〔文亀〕助教 下谷區上野櫻木町二九へ轉居せられました
 加藤〔金美〕 雇 王子區稻付町五ノ九三四へ轉居せられました
 瀨谷〔義広〕書記 王子區志茂町一ノ七九五へ轉居せられました
 金澤〔庸治〕助教 神奈川県高座郡藤澤町鶴沼字藤ヶ谷六八〇三
 ノ二〇一へ轉居せられました

廣川〔松五郎〕教授 板橋區中新井町二ノ九二一へ轉居せられました
 鳩ヶ谷〔敏治〕 雇 豊島區西巢鴨二ノ二〇四七櫻井方へ轉居せら
 れました

元本校配屬將校陸軍砲兵中佐森重幡雄氏は本校勤務中病に罹り郷
 里山口縣萩市大字堀内に引籠り療養中の處十一月六日死去せられた
 り。

芝田校長就任に際し生徒へ訓示
 昭和十一年九月十五日
 私は今度圖らずも命によりて本校々長の職に就くことになりました

昭和十一年文部省美術展覽會委員ヲ委囑ス

た。私も已に相當の年齢でありまして教育の事業には三十年程の經驗を持つて居るのでありますが、何分學徳才能共に見るべきものなから殊に從來美術界のことには餘り關係致さなかつたので斯界の消息に通ぜず果して此の重任を全うし得るや否や頗る懸念致したのであります。官命辭し難く終にお受を致したのであります。幸に本校には夫々の専門に於て我國第一流の先生方が御揃になつて居るのであるから皆様の御協力に信賴し至誠を以て事に當るならばどうにか職責を盡し得るかと思へる次第でありますから宜敷御願を致します。

私は茲に就任挨拶に代へて三つのことを申述べて置きたいと思ふのであります。

其の一は十數年前から私の抱いて居る信念であります。世間では多く有爲有能の人たらんことを理想とする様であります。併しが、私は之に反して無爲を以て理想と致して居る者であります。併し之には少し説明を要します。私の云ふ無爲には二つの意味があります。第一は作爲無しと云ふことであります。彼是人爲的の技工を弄したり、策略を廻らし權謀術數を施して仕事をすることは教育界に於ては絶対に避くべきことと考へて居るのであります。何事も腹と腹とを打ち明けて協議を遂げ其の自然の決定を待ちて事を運び度いと考ふるものであります。

第二の意味は必要以上の仕事を爲さずと云ふことであります。世間では往々自分の在職中に斯々のことしたと云ふ功績を立てんが爲めに好んで仕事を爲さんとする人がありますが、之は決して悪いことではないかも知れませんが、私の信念は之を許さない。私の考では

物事は凡て時機の至るを待ちて實行すべきもので、例令善い事でも、時機の熟するのを待たずして、人爲的に自分の名譽心や何かから割り出して急いで事を爲さんとするのは、天地自然の理に反することと決して善いこととは云へないと確信する者であります。昔の言葉に一將功成りて萬骨枯ると云ふ語がありますが、昔の雄將の中には斯る人もあつたでありませうが之は決して吾々の學ぶべきことではない。特に學校長などは何所迄も教育本位學校本位で行動すべきで、換言すれば教職員及生徒全體の爲めには甘んじて Public servantとして盡力すると云ふ覺悟を以て居なければならぬ。従つて自己の主觀を遮り無二に主張して平地に波瀾を起す様なことは避くべきであると考へて居るのであります。

私は以上二の意味に於ける無爲を以て「モットー」として居る者であります。其れかと云つて何事もせず徒らに祿を食らんと云ふ横着な考を持つて居る者ではありません。必要なこと、學校の爲、教育の爲、國家の爲に是非行はねばならぬと信ずることは萬難を排しても斷行せねばならぬと云ふ責任感に於て敢て人後に落ちない積であります。是又御承知を願つて置きます。之を要するに無事澄然、有事嶄然、之は私が日常服膺致して居る格言の一つであります。

其二は學校長としての希望でありまして、更めて申す迄もないことかも知れませんが、同心協力と云ふことであります。云ふ迄もなく學校は一の組織ある團體であります。此の團體が其の設立の目的に適ひ其の機能を十分に發揮する爲めには其の團體を構成せる各自が、能く團體の目的を自覺し同心協力して全體の爲めに盡すと云ふ

氣持で行動せなければならぬ。人は其の面貌の異なる如く其の氣象も思想も感情も其々異つて居ることは申す迄ありません。其は決して一樣に揃へる必要はないのみならず、到底不可能のことであります。否寧ろ各人各様に獨特の長所を發揮することは大に必要なこと、殊に藝術家たらんとする者は各自の個性、各自の天分を伸長することが極めて大切なことと考へますが、併し一方個性は個性として確保しつゝ共同目的の爲めには互に力を協し心を一にして公の爲めに盡すと云ふ工夫を致さなければならぬと思ふ。お互に些細な事や、小さな感情等に捕はれ^{〔れを〕}ことなく常に大乘的見地に立ち、大局より判断して、小異を捨て大同に着くの覺悟を持つて頂き度い、斯くして校長、教職員、生徒一同が打ちて一丸となり茲に平和にして又正しく且強固なる團體が成立つときは其の團體、其の學校の成果は必ずや眩目して睹るべきものがあると思ふのであります。聖徳太子の十七「條」憲法にある以和爲貴無忤爲宗との教へは千古の至言で我々は常に服膺すべきものであると思ひます。

其三は修養に關したことで主として生徒諸君の留意を求むるのであるが、本校規則第一章第一條に本校へ「専門學校令ニ據り専門ノ美術家ヲ養成スルヲ主旨トシ兼テ圖書及手工教員ヲ養成ス」とあります。

されば生徒諸君は將來専門の美術家となり若くは圖書手工の教員となるのであるが、倅眞の美術家となり眞の教員となるには如何なる修養を積むべきかと云ふ點に思を致すとき、茲に一大決心一大覺悟を決めねばならぬであらうと思ふ。古來文化の理想としては眞善美の三つ若くは眞善美聖の四が擧げられて居るのであるが、結局文

化の極地は美、若くは美聖に歸するのであると思ふ。何となれば眞は必ずしも善美を條件としない。又善も必ずしも眞美を條件としない、眞は眞のみにて、善は善のみにて成立するも獨り美に至りては眞善を極め而も之を超越したる處に至りて始めて本當の美が成立するからである。併し斯く見ることは美の概念を故意に擴げ過ぎたので誤つた考であると論ずる人もありませう。勿論其は美と云ふことの意味によるので相當議論の餘地もありませうが、私は願くば美と云ふことを其所迄高く解釋し、美と聖とを一合せしめ、美の外に別に聖の理想を立つる必要なき迄に、美の意義を高調したのであります。「シヨペンハウエル」は彼の有名な「意志と現識として世界」の中に、美を説明して「認識が意志の使役を離れ、その個體としての我を忘れ、純粹で慾を捨て時間を超越し、一切の相対的關係に拘らざる純粹認識の主觀にするのが美の約束である云々」

又他の所では「此く客觀を純粹に直觀して居ても、それと意志との交渉、個性人格との關係が再び意識に上つて來ては、美の化城は忽ち消えて、我々は根據の原理に支配せられる認識に戻り、それから觀念を認めずに連鎖の一として一々の物を見、我自らもその連鎖の中に入つて悲惨の中に再び沈んでしまふ。云々」と説明して美と云ふ意識は意志を離れ慾を棄て、時間を超越し、全く俗人の境を脱して客觀物（美の對象）と一致融合して三昧の境に入りたる際に起るものなりと説明して居る。此の説に従へば此は宗教に所謂悟の境地、聖の靈域に達したるものと云ふべく、従つて眞善をも超越したる境地と云ふべきであると思ふ。又孔子は論語に門人に對して各其の志を述べしめたるに子路は志を得て千乘の國を治めることにな

れば三年の中に勇ありて且つ方を知らしむべし云々。再求、公西華、又各國を治めること又は小相とならむことを述べた。最後に早哲は琴を弾じて居たが之を止めて「莫春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らん」夫子喟然として嘆じて曰く「吾汝に與せん」之は直接美を高調せる語ではないか、藝に遊ぶことは世俗的の名譽、政治的功業を立つることよりも一段と高尚なるものであることを教へられたものとして味ふべきであると思ふ。

斯く考へ來るときは將來美術家として藝に精進せんとする諸君は斯る境地に達することを理想とせねばならず、従つて其の修養は常人や俗人以上に秀ずるの覺悟を要する次第である。

又師範科に學んで將來教育家たらんとする諸君は更に又人の師表として、學生生徒を薰化するの覺悟がなければならぬ。

聖上陛下が昭和六年東京高等師範六十周年記念式に臨御あらせられまして

健全ナル國民ノ養成ハ一ニ師表タルモノ、徳化ニ俟ツ事ニ教育

ニ從フ者其レ奮勵努力セヨ

と畏き勅語を賜つたのである。教育者及將來教育者たらむとする者は一に此の聖旨を體して奉公の誠を盡さねばならぬのであるが、それにはどうしても人一倍と高き修養を積まねばならぬ。之を要するに將來専門の美術家たらんとする諸君も又教育家たらんとする諸君も各自其の天職に思を致すならば、他の學校に學ぶ青年よりも一段と高雅なる修養を積むの覺悟をして貰はねばならぬと思ふ。

以上所懐の一端を述べて挨拶に代へた次第であります。

關連事項

① 和田英作校長の辭職・名譽教授の称号贈与

既述(720頁)のように、松田改組の際に帝國美術院・帝展改革者側の一人として反対派の攻撃の的となつた和田校長であつたが、昭和十一年春、かろうじて改組第一回帝展が開かれた後も美術界の波瀾は治まらず、さらに文部省当局の不手際な措置が波瀾をさらにかき立てる結果を招いたため、和田校長の犠牲的努力も水泡に帰した。

即ち、松田文相はこの昭和十一年二月に突然死去し、川崎卓吉が文相となつたが、間もなく二・二六事件が起こり、そのため岡田内閣が倒れて広田内閣が成立。平生夙三郎が文相となつた。その際、第一部会(旧帝展第一部日本画部門作家の組織。中心は松岡映丘、小室翠雲、荒木十畝、松林桂月)は飛田周山、島田墨仙、矢沢弦月、野田九浦、勝田蕉琴を代表に立てて再改革試案を文相に提出し、第二部会(同第二部洋画部門作家の組織)も岡田三郎助、藤島武二、和田三造、中村不折、中沢弘光、満谷国四郎、南薫造の七名が再改革の意見書を文相に提出した。因みに矢沢弦月、岡田三郎助、藤島武二、和田三造、南薫造は本校現職教官である。文相はこれらの意見を聞いた上で再改革に踏み切り、前年帝國美術院總會で決定した事柄を白紙に戻し、参与、指定などの格付けを撤廃し、展覽会は以後文部省が主催することとし、かつ新文展は第四部(芸)以外には有鑑査展(鑑査に合格した公募作を展観)と招待展(帝國美術院会員、院長指名の招待者の作品を展観)に分けて時期をずらせて開催することとした。これは旧帝展の弊害の根源となつていた無鑑査特権をまた復活させることを意味し、しかも準備段階にお